

パーソナリティ障害傾向が 対人目標および自己呈示に及ぼす影響 ——親密度の違いに着目して——

筑波大学人間総合科学研究科 櫛引 夏歩

法政大学現代福祉学部 望月 聡

筑波大学人間系 沢宮 容子

The effects of personality disorder attributes on interpersonal goals and self-presentation:
Focusing on differences in closeness to others

Natsuho Kushibiki (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Satoshi Mochizuki (*Faculty of Social Policy and Administration, Hosei University, Machida 194-0298, Japan*)

Yoko Sawamiya (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study was to examine the effects of borderline, narcissistic, histrionic, avoidant, and dependent personality disorder attributes (PD attributes) on interpersonal goals and self-presentation, focusing on differences in closeness to others. A questionnaire survey was administered to 163 undergraduate and graduate students. The results indicated that, for close friends, borderline PD attribute positively influenced self-presentation of communion, and narcissistic PD attribute positively influenced the self-presentation of agency. For acquaintances, histrionic PD attribute and narcissistic PD attribute facilitate or inhibit self-presentation according to interpersonal goals. For someone, histrionic PD attribute promoted self-presentation as mediated by interpersonal goals, and dependent PD attribute was positively associated with self-presentation of competence. These results suggest that the influence processes of interpersonal goals and self-presentation on PD attributes differ depending on the level of closeness with others.

Key words: personality disorder attributes, interpersonal goals, self-presentation, closeness

問題と目的

パーソナリティ障害と対人関係

青年期における対人関係は、個人の適応や精神的

健康に影響する重要な側面であることが従来から指摘されている (e.g., 武蔵・河村, 2016)。青年期における対人関係、特に友人関係は、他者との関わりの中で自分という存在を確かめ、他者と相互作用する存在としての自己を形成していくもの (中間, 2014) とされているように、青年期における対人関係には大きな意味がある。しかし、対人関係におい

て困難を示し、個人の適応に影響を及ぼす精神疾患の一つに、パーソナリティ障害(personality disorder; 以下 PD)がある。PDは、「その人が属する文化から期待されるものから著しく偏り、広範でかつ柔軟性がなく、青年期または成人期早期に始まり、長期にわたり変わることなく、苦痛または障害を引き起こす内的体験および行動の持続様式」(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014, p.635)と定義されており、これらの様式は(1)認知(自己, 他者, および出来事を知覚し解釈する仕方), (2)感情性(情動反応の範囲, 強さ, 不安定性, および適切さ), (3)対人関係機能, (4)衝動の制御が2つまたはそれ以上の領域に現れるとされている(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)。PDは本人だけでなく、周囲の他者も苦痛を感じ、生活に支障が生じるとされており(市橋, 2017)、実際にPDの中には他者から否定的な印象に見られるものが存在することが示されている(e.g., South, Oltmanns, & Turkheimer, 2005)。このようなPDの対人関係上の困難に関連する要因として、対人行動の問題があると考えられる。例えば, Williams, Thomas, Donnellan, & Hopwood (2014)において、PD特性は嫌悪的な対人行動と関連することが示されており、不適応的な対人行動を行うことで、他者との関係性に支障をきたしている可能性がある。

PDと自己呈示

本研究では、PDの対人行動の特徴を解明するために自己呈示に着目する。安藤(1994)は自己呈示を、「自己の様々な側面を選択的に見せたり見せなかったりすること」としており、日常生活において、人々はその場の状況や相互作用する他者に応じて自己の見せる側面を変えていると考えられる。しかし、PDは目標に合わせて自身の行動を調整することが困難であるとされている(Wright, Hopwood, & Simms, 2015)。これを踏まえると、PDは状況や相手に応じて自己呈示を変容することが難しいために、対人関係上で困難を示す可能性がある。PDと自己呈示との関連を検討した先行研究はいくつかあるものの(e.g., Hart, Tortoriello, & Richardson, 2020; Sherry, Hewitt, Flett, Lee-Bagley, & Hall, 2007)、状況や他者に応じたPDの自己呈示について検討した研究はほとんど見られない。日常生活において経験する社会的状況や相互作用する他者は多様であり、PDの対人関係機能を向上させるために、日常場面に即した対人トレーニングを行う重要性が指摘されている(Lis & Bohus, 2013)。このことから、

複数の社会的状況や他者を考慮したPDの自己呈示について検討する必要がある。

対人目標と他者との親密度への着目

先行研究の問題点を踏まえ、本研究では自己呈示に関連する要因の一つである対人目標(Leary & Allen, 2011)に着目する。自己呈示における対人目標は、相手にどのような印象を与えたいか、すなわち「どんな人に見られたいか」と言い換えることができ、自己呈示に大きく影響すると考えられる。また、Leary, Allen, & Terry (2011)は、日常生活における自己呈示の目標は呈示者自身や他者にとって、長期的に、意味のある結果をもたらし、その目標は関わる他者に応じて変化するとしている。先行研究では、他者との親密度に応じて異なる対人目標が設定されることが示されている。例えば、Leary et al. (1994)は、新入生はよく知らない同性の相手に対しては、好ましく、有能そうな印象を与えたいという自己呈示動機を持ち、頻繁に関わる同性の友人に対する自己呈示動機は低いことを示している。また、Nezlek & Leary (2002)は、初対面の他者に対しては「良く見られたい」という自己高揚的な対人目標が立てられることを明らかにしている。さらに、Swann (1990)は、親密度の高い他者に対しては自己確証的な、すなわち個人の自己概念に沿った対人目標が立てられると指摘している。以上を踏まえると、人々は初対面の他者に対しては自己高揚的な対人目標を持ち、他者との親密度が深まるにつれて、本来の自分に近い姿を他者に見せたいという自己確証的な対人目標を持つことが一般的であると考えられる。親密度が低い段階では、友人と親しくしたいという欲求から友人との相互作用を引き起こすと考えられ(榎本, 2000)、この欲求が満たされ、相手との親密度が十分に高まることで本来の自分を見せたいという気持ちが生じると推察される。

対人目標に基づき、人々は日常生活上で自己呈示を行うが、他者との親密度に応じた自己呈示を行うことが適応的であるとされている。Gosnell, Britt, & Mckibben (2011)は、相手と親しい関係でない場合には、自己呈示を多く行うことが関係満足感の高さにつながることを示している。谷口・清水(2017)では、関係性初期段階の自己呈示行動について縦断的調査を行っており、親しみやすさや有能さのような自己高揚的自己呈示を行うことが、その後の自尊心や関係満足度につながることを示している。このように、親密度が高くない他者や関係性初期段階では、自己高揚的自己呈示を行うことが良好な対人関

係につながり、その背景には呈示者の「どのように見られたいか」という対人目標が強く関連していると考えられる。その一方で、Gosnell et al. (2011) は、相手と親しい関係である場合、自己呈示を多く行うことが関係満足感を低下させることを示している。また、佐藤 (2019) は、自動的に行われる習慣化された自己呈示に着目し、親しい相手に対してそのような自己呈示を多く行うことが精神的健康にネガティブな影響を及ぼすことを示している。Canevello & Crocker (2011) では、親密な関係において、他者からの肯定的評価を得ようとする対人目標は自尊感情を損なう可能性があることが示されており、親しい相手に対して高い対人目標を持つことや、自己呈示を多く行っていると認識していることは、対人関係や呈示者に対してネガティブな影響を及ぼしている可能性がある。実際、酒井 (1996) では、自分の「見栄を張った自己呈示」という否定的な自己高揚的自己呈示によって自己嫌悪や自己批判などの否定的意識が生じることを示している。このことから、特に親密度の高い他者に対する自己高揚的自己呈示が、呈示者側にネガティブな影響を及ぼす可能性がある。

以上のように、親密度によって適切な対人目標や自己呈示は異なることが予想されることから、初対面の他者と親しい友人に対する対人目標および自己呈示について検討を行う。また、本研究では“半知り”の他者についても取り上げる。“半知り”の他者は、特に親しくもなく、特に見知らぬ人でもない中間的な関係にある人々 (笠原, 1972) であり、初対面の他者と親しい友人の中間の親密度に位置する他者であると想定される。佐々木・菅原・丹野 (2005) において、対人不安の高い人は、心理的距離が近い他者や心理的距離が遠い他者よりも、心理的距離が中間の他者に対してより強い羞恥感を経験することが示されている。このことから、初対面の人と親しい友人に加えて、半知りの他者についても検討することで、より詳細な知見が得られると推察される。

PD と対人目標、他者との親密度との関連

先述したように、初対面の他者や親密度の低い相手に対しては自己高揚的な対人目標を持ち、それに基づいた自己呈示が多く行われる一方で、親密度の高い相手に対しては自己高揚的な対人目標は持たず、自己呈示も減少することが一般的であると考えられる。親密度の低い相手に行われる自己呈示は、相手との親密度をより高めるために行われると考えられるが、いくつかの PD においては良好な対人関係につながる自己呈示が見られない可能性がある。

例えば、社会的抑制、不全感、および否定的評価に対する過敏性を示す回避性 PD は、好かれていると確信できなければ、新しい友人を作ろうとしないという特徴がある (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)。このことから、回避性 PD は初対面の他者と相互作用する場面を避け、対人目標の設定や自己呈示を行わない可能性がある。また、境界性 PD 患者は、初対面の他者の顔写真を否定的に、かつ敵意的に評価すること (Barnow et al., 2009) や、自己愛傾向の高さは親密性と負の関連を示すこと (原田, 2013) が示されており、このような他者に対する否定的認知や親密になることを回避する傾向が、他者との親密化を阻害していると考えられる。さらに、市川・外山・望月 (2015) では、境界性・自己愛性・演技性・回避性・依存性 PD の他者からの評価欲求について、演技性 PD は被受容感の高さを媒介して肯定的に評価されたいという欲求と関連する一方で、多くの PD は被受容感の低さを媒介して否定的に評価されたいという欲求と関連することが示されている。このことから、演技性 PD を除いた多くの PD が、他者に対してネガティブな対人目標を持つこと、もしくは対人目標と関連しないことが予想され、関係性を形成する自己呈示を行わない、あるいはネガティブな自己呈示を行っている可能性がある。ただし、市川他 (2015) では、どのような他者に対する評価欲求を想定したものであるかは明確にされておらず、PD における対人目標や自己呈示は、他者との親密度に応じて異なるのかについては明らかにされていない。

本研究の目的

以上より、本研究の目的は PD の対人目標が自己呈示に及ぼす影響について、親密度の違いに着目して検討することである。他者との親密度を区別して検討を行うことで、親密度のどの段階で、どのような不適応を示しているのかを解明することにつながり、PD の対人関係の困難に対する支援や介入方法に関する有用な知見が得られることが期待される。なお、本研究では、DSM-5 (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014) で定義されている10種類の PD のうち、境界性・自己愛性・演技性・回避性・依存性 PD に着目して検討を行う。これらの PD は概念的オーバーラップが多く指摘されていることから (e.g., 市川・望月, 2014)、各 PD の特徴の明確化が試みられている (e.g., 市川他, 2015)。そこで、本研究においても市川他 (2015) などに倣い、多変量解析による検討を行うため、一般

大学生による健常者群を対象としたアナログ研究を行い、各PDの特徴の程度を「PD傾向」と表記する。

さらに、本研究では対人目標および自己呈示の側面として「親しみやすさ」と「有能さ」の側面を扱う。Paulhus & Trapnell (2008)によると、自己呈示の領域はCommunionとAgencyに分類されるとされており、谷口・清水(2017)では、Communionを親しみやすさ、Agencyを有能さとした自己呈示の検討を行っている。これらの領域において、人々は他者からの肯定的な評価を望むと考えられることから、本研究においても、親しみやすさと有能さの自己呈示の側面を扱うことにした。

方 法

調査時期

2020年8月から2021年2月にかけて実施した。

調査協力者

大学生・大学院生163名(男性50名、女性111名、不明2名;平均年齢21.15歳、 $SD=1.78$)であった。

調査内容

デモグラフィック変数 年齢および性別について回答を求めた。

PD傾向 DSM-5パーソナリティ障害のための構造化面接(Structured Clinical Interview for DSM-5 personality disorders: SCID-5-PD; First, Williams, Benjamin & Spitzer, 2016; 高橋・大曾根 2017)に含まれるスクリーニングパーソナリティ質問票(SCID-5-SPQ)を使用した。本尺度はPDのスクリーニングをする目的として使用されるものであり、DSM-5の診断基準に準拠した項目となっている。本研究では、境界性PDに関する15項目、自己愛性PDに関する17項目、演技性PDに関する8項目、依存性PDに関する8項目、回避性PDに関する7項目の計55項目を使用した。本来は各項目について「はい」、「いいえ」の2件法で回答を求めめる尺度だが、本研究ではPD傾向のアナログ研究を行うため、市川・望月(2014)などに倣い「いいえ(1)」、「どちらかといえばいいえ(2)」、「どちらともいえない(3)」、「どちらかといえばはい(4)」、「はい(5)」の5件法でそれぞれ回答を求めた。

親密度の異なる他者 親密度の異なる他者として、友人関係に限定し、「あなたにとって最も親しい同性の友人」(以下、友人)、「あなたにとって顔見知りで話すことはできるが、まだ深く関わっていない

同性の人」(以下、半知り)、「あなたにとって初対面の同性の人」(以下、初対面)の3つを設定した。それぞれの他者との親密度について、「親密さ・低(1)」から「親密さ・高(7)」までの7件法で回答を求めた。

対人目標 親密度の異なる他者に対する対人目標を測定するために、市川他(2015)が使用した特性形容詞、和田(1996)のBig Five尺度および吉田・高井(2008)がBig Five尺度(和田, 1996)の否定語を肯定語に変更した形容詞から親しみやすさに関する5項目、有能さに関する5項目の全10項目を抜粋し、各形容詞を「～(に)見られたい」(項目例:「親しみやすく見られたい」、「有能に見られたい」等)という語尾につながるように修正して、親しみやすさの対人目標(以下、親しみ目標)および有能さの対人目標(以下、有能目標)を測定した。それぞれの項目について、「まったくあてはまらない(1)」から「非常にあてはまる(7)」までの7件法で回答を求めた。

自己呈示 親密度の異なる他者に対する自己呈示を測定するために、対人目標において抜粋した形容詞について、「～にふるまう」(項目例:「親しみやすくふるまう」、「有能にふるまう」という語尾につながるように修正して、親しみやすさの自己呈示(以下、親しみ呈示)および有能さの自己呈示(以下、有能呈示)を測定した。それぞれの項目について、「まったくあてはまらない(1)」から「非常にあてはまる(7)」までの7件法で回答を求めた。

指示項目 不適切回答を抽出するために指示項目を2項目設定した(項目例:「この項目では2を選んでください」等)。2つの指示項目のうち、いずれか一つでも指示に従っていない回答をしていた9名は、今回の分析から除外した。

なお、調査には他の尺度も含まれていたが、今回の分析には使用しなかったため、説明を省略した。

手続き

Google フォームのURLとQRコードが記載された募集用紙を配信し、調査への協力に同意する場合はGoogle フォームにアクセスし、回答するように求めた。アンケート調査への回答はいずれも無記名で行われ、回答所要時間は15～20分程度であった。

倫理的配慮

本研究は、筑波大学人間系研究倫理審査委員会にて審査を受け、承認されたうえで実施した(課題番号:筑2020-65A号)。調査協力者には、調査への協力は自由意思に基づき、協力しなくとも不利益は生じな

いこと、また、調査によって得られた個人情報の保護を保証することを回答画面に記載した。

分析

分析には IBM SPSS Statistics 26 および IBM SPSS Amos 26 を使用した。

結 果

親密度の操作チェック

友人、半知り、初対面それぞれに対する親密度の操作が想定通りに行われていたかを確認するために、参加者内一元配置分散分析を行った。その結果、有意な主効果が見られたため ($F(2, 324) = 332.26, p < .001$)、Bonferroni の多重比較を行った。その結果、友人、半知り、初対面の順で親密度の平均値が有意に高かった。以上より、それぞれの他者に対する親密度に違いがあることが確認された。

各尺度の信頼性係数と記述統計量

各 PD に関する項目の内的一貫性を確認するために、それぞれの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .64 \sim .81$ と一部十分とは言えないものの、概ね良好な内的一貫性が確認された。先行研究 (e.g., 市川

他, 2015) においても同程度の α 係数が得られているため、本研究で得られた α 係数は許容範囲内として、その後の分析を行った。

対人目標について、友人における親しみやすさに関する 5 項目および有能さに関する 5 項目についてはいずれも $\alpha = .91$ であり、高い一貫性が確認された。半知りにおける親しみやすさに関する 5 項目および有能さに関する 5 項目については $\alpha = .92$ であり、高い一貫性が確認された。初対面における親しみやすさに関する 5 項目については $\alpha = .94$ 、有能さに関する 5 項目については $\alpha = .91$ であり、高い一貫性が確認された。

自己呈示について、友人における親しみやすさに関する 5 項目については $\alpha = .91$ 、有能さに関する 5 項目については $\alpha = .92$ であり、高い一貫性が確認された。半知りにおける親しみやすさに関する 5 項目については $\alpha = .92$ 、有能さに関する 5 項目については $\alpha = .93$ であり、高い一貫性が確認された。初対面における親しみやすさに関する 5 項目については $\alpha = .93$ 、有能さに関する 5 項目については $\alpha = .92$ であり、高い一貫性が確認された。

各変数の平均値、標準偏差および各尺度の得点範囲と Cronbach の α 係数を Table 1 に示した。

Table 1
各変数の記述統計量

	得点範囲	平均値	標準偏差	α 係数
SCID-5-SPQ				
境界性 PD 傾向	15-75	34.44	10.41	.81
自己愛性 PD 傾向	17-85	35.08	9.13	.78
演技性 PD 傾向	8-40	19.55	5.46	.64
回避性 PD 傾向	7-35	21.82	5.40	.65
依存性 PD 傾向	8-40	17.87	5.59	.70
対人目標				
友人・親しみ	7-35	21.52	7.23	.91
友人・有能	7-35	18.48	7.46	.91
半知り・親しみ	7-35	24.34	6.67	.92
半知り・有能	7-35	18.83	6.80	.92
初対面・親しみ	7-35	25.42	7.15	.94
初対面・有能	7-35	20.37	7.25	.91
自己呈示行動				
友人・親しみ	7-35	21.20	6.97	.91
友人・有能	7-35	16.99	7.01	.92
半知り・親しみ	7-35	24.97	6.13	.92
半知り・有能	7-35	18.55	7.12	.93
初対面・親しみ	7-35	26.15	6.28	.93
初対面・有能	7-35	19.03	7.05	.92

PD 傾向と対人目標および自己呈示の相関分析

PD 傾向と対人目標および自己呈示の相関係数を Table 2 に示した。友人・親しみ目標は依存性 PD 傾向との間に有意な正の相関 ($r = .19, p < .05$) が見られた。友人・有能目標は自己愛性・演技性 PD 傾向との間に有意な正の相関が見られた ($r = .20 - .21, ps < .05$)。半知り・親しみ目標は演技性 PD 傾向との間に有意な正の相関が見られた ($r = .18, p < .05$)。半知り・有能目標は自己愛性・演技性 PD 傾向との間に有意な正の相関が見られた ($r = .21 - .25, p < .01$)。初対面・親しみ目標は、演技性・回避性・依存性 PD 傾向との間に有意な正の相関が見られた ($r = .17 - .24, ps < .05$)。初対面・有能目標は境界性・自己愛性・演技性 PD 傾向との間に有意な正の相関が見られた ($r = .23 - .29, ps < .01$)。

友人・親しみ呈示は境界性・依存性 PD 傾向との間に有意な正の相関が見られた ($r = .17 - .23, ps < .05$)。友人・有能呈示は境界性・自己愛性・演技性 PD 傾向との間に有意な正の相関が見られた ($r = .17 - .31, ps < .05$)。半知り・親しみ呈示は境界性・演技性 PD 傾向との間に有意な正の相関が見られた ($r = .19 - .21, ps < .05$)。半知り・有能呈示は境界性・自己愛性・演技性 PD 傾向との間に有意な正の相関が見られた ($r = .24 - .29, ps < .01$)。初対面・親しみ呈示は演技性 PD 傾向と有意な正の相関が見られた ($r = .18, p < .05$)。初対面・有能呈示は境界性・自己愛性・演技性・依存性 PD 傾向との間に有

意な正の相関が見られた ($r = .20 - .27, ps < .05$)。

PD 傾向が対人目標を媒介して自己呈示に及ぼす影響

PD 傾向から対人目標を媒介して自己呈示に及ぼす影響を検討するために、各 PD 傾向から親しみ目標および有能目標を媒介して親しみ呈示および有能呈示に寄与するというモデルを仮定して、共分散構造分析を行った。その際、全ての PD 傾向得点の各誤差変数間と、親しみ目標と有能目標の各誤差変数間、親しみ呈示と有能呈示の誤差変数間にそれぞれ共分散を仮定した。まず友人条件について、有意でないパスを削除したところ、最終的に Figure 1 のモデル図が得られた。モデルの適合度は $\chi^2(20) = 39.94 (p < .01)$, CFI = .96, GFI = .95, RMSEA = .08 であった。境界性 PD 傾向から親しみ呈示への有意な正のパスが ($\beta = .18, p < .001$)、自己愛性 PD 傾向から有能呈示への有意な正のパスが見られた ($\beta = .15, p < .01$)。親しみ目標から親しみ呈示への有意な正のパスが見られた ($\beta = .68, p < .001$)。有能目標から有能呈示への有意な正のパスが見られた ($\beta = .75, p < .001$)。

次に半知り条件について、有意でないパスを削除したところ、最終的に Figure 2 のモデル図が得られた。モデルの適合度は $\chi^2(16) = 18.78 (p = .28)$, CFI = 1.00, GFI = .98, RMSEA = .03 と良好であった。演技性 PD 傾向から親しみ目標への有意な正のパスが

Table 2
PD 傾向と対人目標および自己呈示間の相関分析

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1 境界性 PD 傾向	.04	.09	.12	.15	.11	.23**	.23**	.17*	.19*	.24**	.15	.24**
2 自己愛性 PD 傾向	-.03	.21**	-.01	.21**	.01	.24**	.07	.31***	-.02	.25**	-.00	.24**
3 演技性 PD 傾向	.13	.20*	.18*	.25**	.19*	.29***	.13	.24**	.21**	.29***	.18*	.27***
4 回避性 PD 傾向	.14	-.02	.10	.06	.17*	.09	.13	.01	.05	-.01	.10	.09
5 依存性 PD 傾向	.19*	.02	.04	.08	.24**	.14	.17*	-.01	.10	.06	.15	.20*
6 友人・親しみ目標	-	.66***	.57***	.49***	.33***	.40***	.68***	.47***	.41***	.37***	.31***	.31***
7 友人・有能目標	-	-	.42***	.66***	.13	.46***	.46***	.76***	.24**	.60***	.08	.42***
8 半知り・親しみ目標	-	-	-	.59***	.70***	.56***	.41***	.26***	.80***	.43***	.69***	.47***
9 半知り・有能目標	-	-	-	-	.34***	.76***	.40***	.59***	.46***	.84***	.30***	.72***
10 初対面・親しみ目標	-	-	-	-	-	.50***	.28***	.07	.71***	.27***	.85***	.43***
11 初対面・有能目標	-	-	-	-	-	-	.39***	.38***	.53***	.75***	.44***	.85***
12 友人・親しみ呈示	-	-	-	-	-	-	-	.54***	.46***	.38***	.30***	.37***
13 友人・有能呈示	-	-	-	-	-	-	-	-	.20*	.62***	.08	.39***
14 半知り・親しみ呈示	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.43***	.76***	.50***
15 半知り・有能呈示	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.26***	.79***
16 初対面・親しみ呈示	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.39***
17 初対面・有能呈示	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

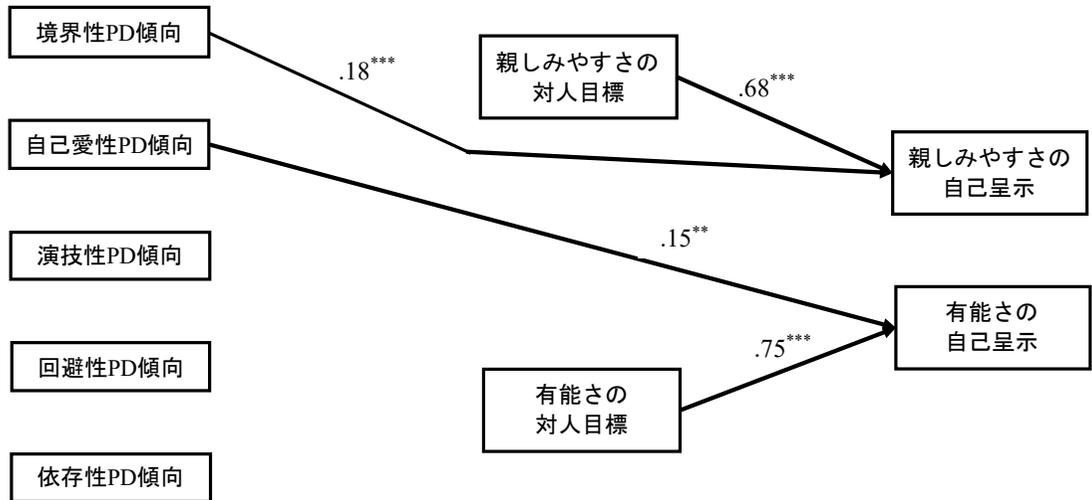


Figure 1. PD 傾向と友人に対する対人目標および自己呈示についての共分散構造分析の結果
 注1. 図の煩雑化を避けるために、誤差変数および共分散は省略した。
 注2. 正のパスは実線、負のパスは破線で表した。
 *** $p < .001$, ** $p < .01$

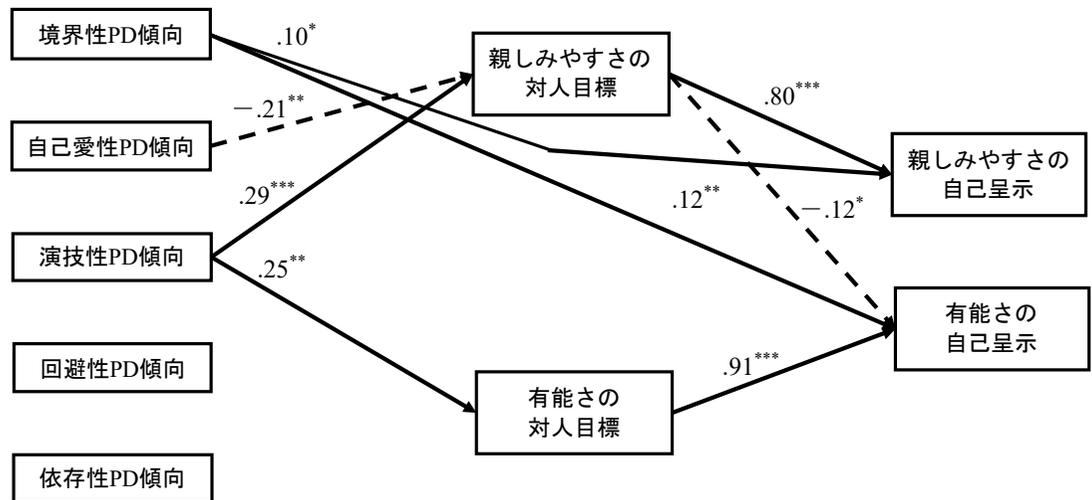


Figure 2. PD 傾向と半知りに対する対人目標および自己呈示についての共分散構造分析の結果
 注1. 図の煩雑化を避けるために、誤差変数および共分散は省略した。
 注2. 正のパスは実線、負のパスは破線で表した。
 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

($\beta = .29, p < .001$), 自己愛性 PD 傾向から親しみ目標への有意な負のパスが見られた ($\beta = -.21, p < .01$)。演技性 PD 傾向から有能目標への有意な正のパスが見られた ($\beta = .25, p < .01$)。境界性 PD 傾向および親しみ目標は親しみ呈示へと有意な正のパスが見られた (順に, $\beta = .10, p < .05$; $\beta = .80, p$

$< .001$)。親しみ目標から有能呈示へと有意な負のパスが ($\beta = -.12, p < .05$)、有能目標から有能呈示へと有意な正のパスが見られた ($\beta = .91, p < .001$)。共分散構造分析の結果を踏まえ、自己愛性・演技性 PD 傾向から自己呈示に対する対人目標の間接効果の有意性を検定するために、Bootstrap 法 (Bootstrap 標

本数：5,000回；信頼区間：95%）による媒介分析を行い、バイアス修正ブートストラップ信頼区間を算出した。その結果、自己愛性PD傾向から親しみ呈示への親しみ目標の間接効果 ($\beta = -.17$, 95%CI [-.31, -.03])、自己愛性PD傾向から親しみ呈示への親しみ目標の間接効果 ($\beta = .03$, 95%CI [.00, .07])、演技性PD傾向から親しみ呈示への親しみ目標の間接効果 ($\beta = .23$, 95%CI [.09, .39])、演技性PD傾向から有能呈示への親しみ目標の間接効果 ($\beta = -.04$, 95%CI [-.08, -.01])、演技性PD傾向から有能呈示への有能目標の間接効果 ($\beta = .23$, 95%CI [.08, .37]) は、CIに0が含まれていなかったため有意であった。以上より、自己愛性・演技性PD傾向と自己呈示との間における対人目標には完全媒介が認められた。

最後に初対面条件について、有意でないパスを削除したところ、最終的に Figure 3のモデル図が得られた。モデルの適合度は $\chi^2(19) = 26.92$ ($p = .11$)、CFI = .99、GFI = .97、RMSEA = .05と良好であった。演技性PD傾向から親しみ目標への有意な正のパスが ($\beta = .19$, $p < .05$)、有能目標への有意な正のパスが見られた ($\beta = .29$, $p < .001$)。親しみ目標から親しみ呈示への有意な正のパスが見られた ($\beta = .85$, $p < .001$)。依存性PD傾向および有能目標から有能呈示への有意な正のパスが見られた (順に、 $\beta = .09$, $p < .05$; $\beta = .84$, $p < .001$)。共分散構造分析の結果を踏まえ、演技性PD傾向から自己呈示に対する対人

目標の間接効果の有意性を検定するために、Bootstrap法(Bootstrap 標本数：5,000回；信頼区間：95%)による媒介分析を行い、バイアス修正ブートストラップ信頼区間を算出した。その結果、演技性PD傾向から親しみ呈示への間接効果 ($\beta = .16$, 95%CI [.04, .27])、演技性PD傾向から有能呈示への間接効果 ($\beta = .25$, 95%CI [.12, .37]) は、CIに0が含まれていなかったため有意であった。以上より、演技性PD傾向と自己呈示との間における対人目標には完全媒介が認められた。

考 察

本研究の目的は、境界性・自己愛性・演技性・回避性・依存性PD傾向の対人目標が自己呈示に及ぼす影響について、親密度の違いに着目して検討することであった。以降では、各PD傾向の対人目標が自己呈示に及ぼす影響について、親密度の違いを踏まえて考察を行う。

境界性PD傾向における対人目標が自己呈示に及ぼす影響

境界性PD傾向は、親しい友人への親しみやすさの自己呈示の高さと関連し、半知りの人における親しみやすさおよび有能さの自己呈示の高さと関連していた。すなわち、境界性PD傾向の高い個人は、親しい友人に対しては親しみやすく振る舞い、半知

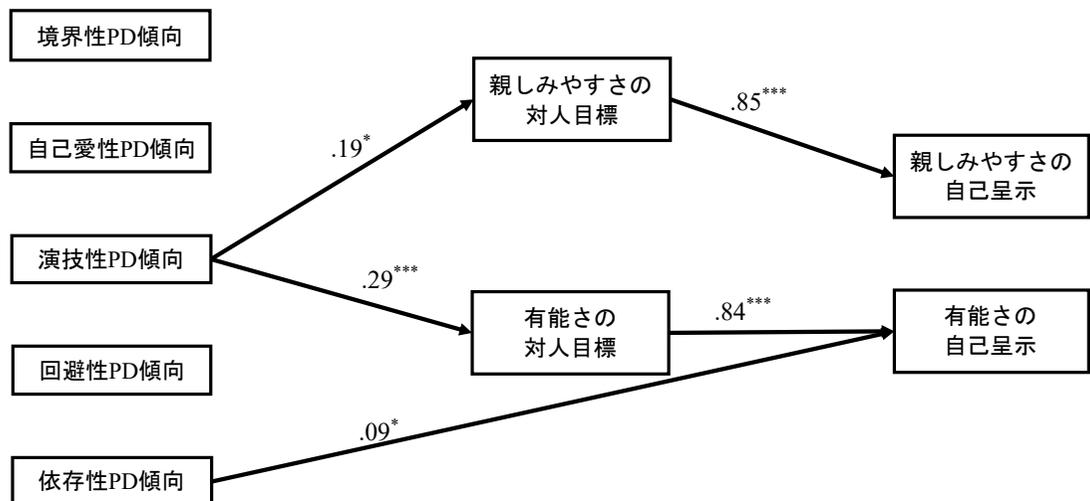


Figure 3. PD傾向と初対面に対する対人目標および自己呈示についての共分散構造分析の結果

注1. 図の煩雑化を避けるために、誤差変数および共分散は省略した。

注2. 正のパスは実線、負のパスは破線で表した。

*** $p < .001$, * $p < .05$

りの人に対しては、親しみやすくも、有能そうにも振る舞うことが示された。境界性PDの主要な症状には見捨てられ不安があることから(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)、境界性PD傾向の高い個人が親しいと感じている他者から見捨てられないよう、親しみやすさの自己呈示を行い続けることで、高い親密度を維持しようとしている可能性がある。また、半知りの人に対しても、他者との親密度が高まると予想される親しみやすさと有能さの自己呈示のいずれも行っていることが示された一方で、初対面の人に対する自己呈示との関連は見られなかった。このことから、境界性PD傾向の高い個人は、初対面の他者に対する否定的認知(Barnow et al., 2009)により、初対面の他者との関係を築くような対人行動は示さないが、他者との親密度がある程度高まったと認識した際に、親密度をより高めるような対人行動を示すと考えられる。ただし、境界性PD傾向はいずれの条件においても対人目標との関連は示されなかった。境界性PDは不安定な自己像や自己意識により特徴づけられる同一性の障害があること(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)から、明確な対人目標を持たずに対人行動を行っている可能性がある。対人目標を設定する前に自己呈示を行うことで、自己呈示を行った後に、普段の自分と呈示した自分とを比較し、普段の自分に沿わない無理な自己呈示をしていたと認識することで、感情面や精神的健康に悪影響をもたらす可能性がある(酒井, 1996)。また、親密度の高い他者に対して自己呈示を多く行うことは不適応的であるとされている(Gosnell et al, 2011; 佐藤, 2019)。これらのことから、親密な関係であっても、無理な自己呈示を行っていることが境界性PDの対人関係上の困難につながっている可能性がある。

自己愛性PD傾向における対人目標が自己呈示に及ぼす影響

自己愛性PD傾向は親しい友人に対する有能さの自己呈示と正の関連を示していた。自己愛性PDは誇大性や賛美されたい欲求という基本的特徴(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)を持ち、有能さの自己呈示は呈示者の自尊感情を高める(谷口・清水, 2017)。このことから、親密度の高い他者、すなわち自身を受容していると認識している他者に対して、自己愛性PD傾向の高い個人は有能な自己を示すことで、自己評価を維持・向上させていると考えられる。その一方で、半知りの人に対しては、自己愛性PD傾向は親しみ

やすさの対人目標を媒介して、親しみやすさの自己呈示に負の影響を、有能さの自己呈示に正の影響を及ぼしていた。このことから、自己愛性PD傾向の高い個人は親密度が中程度の他者に対しては、親しみやすく見られたくないという目標を基に、親しみやすく振る舞わず、有能に振る舞うといえる。自己愛性PD傾向の高い個人は、他者に受容されていないと感じることで否定的に思われたいという欲求を高めること(市川他, 2015)や、自己愛傾向は親密性と負の関連を示すこと(原田, 2013)を踏まえると、自己愛性PD傾向の高い個人にとって半知りの人は、親しい友人と比べて受容感が得られにくいと考えられる。したがって、自己愛性PD傾向の高い個人は、親しみやすさを抑制し、有能さを誇示することで親密になることを避けている可能性がある。このような自己愛性PD傾向の他者を寄せ付けないような対人目標や対人行動が、他者からの否定的評価(South et al., 2005)を引き出すと推察される。初対面の他者においては、自己愛性PD傾向は対人目標および自己呈示のいずれとも関連しなかった。自己愛性PDは他者を見下す傾向があることから、初対面の他者と関係を構築するような対人目標の設定や自己呈示することに積極的ではないと考えられる。

演技性PD傾向における対人目標が自己呈示に及ぼす影響

演技性PD傾向は、親しい友人において、対人目標および自己呈示のいずれとも関連は見られなかった。その一方で、半知りの人および初対面の人において、演技性PD傾向は親しみやすさの対人目標を媒介して親しみやすさの自己呈示を行うこと、有能さの対人目標を媒介して有能さの自己呈示を行うことが共通の結果として示された。また、半知りの人において、演技性PD傾向は親しみやすさの対人目標を媒介して、有能さの自己呈示を抑制していることが示された。従来の知見では、親密度が高まるにつれて自己高揚的な対人目標や自己呈示は低下することが適応的であるとされていること(e.g., Gosnell et al., 2011; Leary et al., 1994)から、本研究の結果は演技性PD傾向の適応的な側面であると捉えることができる。演技性PDは過度な情動性と注意を引こうとする行動に加え、対人関係を実際以上に親密なものと思っているという特徴(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)から、他者に賞賛されたいと同時に、他者と親密になりたいという欲求を有しているといえる。したがって、初対面の人や半知りの人は、今後も親密度

を高めることが可能であると予想されるため、自己高揚的な対人目標を持ち、積極的な自己呈示を行うことで他者との関係を構築していると推察される。親しい友人については、演技性PD傾向の高い個人にとって満足できる親密度を得ていると推察されることから、自己高揚的な対人目標の設定や自分を良くみせようとする自己呈示を行うことにはほとんど動機づけられていないと考えられる。

回避性PD傾向における対人目標が自己呈示に及ぼす影響

回避性PD傾向はいずれの条件においても、対人目標および自己呈示に関連を示さなかった。回避性PDは好かれていると確信できなければ、人と関係を持ちたがらないことや、不全感のために新しい対人関係状況で抑制が起こることが特徴として挙げられている(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)。このことから回避性PD傾向の高い個人は、関係性が開始されていない初対面の人との相互作用を回避すると考えられ、初対面の人に対して対人目標を設定したり、自己呈示を行ったりする段階まで至らない可能性がある。また、回避性PDは不安症、特に社交不安症(社交恐怖)と同時に診断されることが多いとされており(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)、半知りの人は対人恐怖症の患者が苦手としている相手である(笠原, 1972)。対人不安が高い個人において、半知りの人はより強い羞恥心を経験することから(佐々木他, 2005)、回避性PD傾向が高い個人においては、親密度を深められる確信が持たない半知りの人に対しても回避的な傾向を示し、対人目標や自己呈示と関連しなかったと考えられる。親しい友人の場合でも、回避性PD傾向は対人目標および自己呈示と関連しなかった。親しい友人の場合は、一般的には自己高揚的な対人目標や自己呈示と関連しないと推察されることから(e.g., Leary et al., 1994)、回避性PD傾向が高い個人においても先行研究の知見が適応されると考えられる。しかし、市川他(2015)において、被受容感のなさが回避性PD傾向の否定的に評価されたいという欲求を高めることが示されている。したがって、被受容感や否定的評価への過敏性のような対人目標に関連すると予想される要因も併せて検討することで、回避性PD傾向の対人関係上の困難がより明確になる可能性がある。

依存性PD傾向における対人目標が自己呈示に及ぼす影響

依存性PD傾向は、初対面の人に対する有能さの自己呈示と正の関連を示していた。依存性PDは自分の能力と長所を過小評価する傾向があり、他者にしがみつこうような態度を示すとされているが(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)、初対面の人に対しては有能な自己を示すという結果が得られた。また、対人目標に関しては、親しい友人、半知りの人、初対面の人のいずれにおいても依存性PD傾向との間に有意な関連は見られなかった。依存性PD傾向が高い個人は、自分の面倒を見ることに対する恐怖がある一方で(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)、他者からの被受容感や被拒絶感との関連は見られない(市川他, 2015)。このことから、他者にどのように見られたいかという目標に関心が向けられておらず、他者にどう思われているかに関係なく、面倒を見てもらいたいという欲求から服従的な行動を取り続けると考えられる。ただし、依存性PD傾向のこのような特徴は、ある程度親密度のある他者に対して見られるものであると考えられる。初対面のような関係初期段階においては、依存性PD傾向の高い個人は有能さを示すことで他者との関係構築を試み、親密度が高まっていくにつれて依存的になっていく可能性がある。

まとめと今後の展望

以上の検討から、境界性PD傾向は親密度の高い他者に対する親しみやすさの自己呈示や、対人目標を設定せずに行動していることで不適応が生じている可能性が示された。また、自己愛性PD傾向は親密度の高い他者に対する有能さの呈示や、中程度の親密度の他者に対する親密になることを避けるような対人目標や自己呈示が、対人関係上で支障をきたしていることが示唆された。演技性PD傾向については、従来の自己呈示に関する知見(e.g., Leary et al., 1994)から大きく逸脱するような傾向は見られず、親密度に応じた適度な対人目標の設定や自己呈示をすることができていると考えられる。回避性PD傾向は、親密度の低い他者であっても、親密になるための対人目標や自己呈示にはつながらず、依存性PD傾向は、初対面の他者であれば有能さを示すということが明らかになった。親密度別に各PD傾向における対人目標や自己呈示について検討することで、それぞれのPD傾向がどの側面で、どのような不適応を生じさせているのかを解明する一助となり、PDに対する介入や支援方法の検討に役立つと

考えられる。

本研究の限界点として、一点目に、場面想定法を用いた横断的調査であったことが挙げられる。今後は日常生活上で相互作用する他者との親密度の高まりと実際の自己呈示行動を考慮した縦断的調査を実施することで、本研究の知見をより精緻化できると考えられる。二点目に、それぞれの他者を想起させる教示の問題が挙げられる。半知りの人や親しい友人は、個人にとって今後も関わる可能性のある他者が想定されたと考えられるが、初対面の他者に関しては、今後も関わる事が予想される他者だけでなく、その場限りの関係で終結する他者も想起された可能性がある。したがって、“今後も関わる事が予想される他者”という点を考慮した教示を検討する必要がある。最後に、“友人関係”における“同性の他者”を想起させた点が挙げられる。日常の対人関係では他者との多様な関係性を経験し、関わり方は相手が同性か異性かによっても異なる可能性がある。このことから、友人関係以外の関係性におけるPD傾向の対人目標や自己呈示について比較検討することで、各PD傾向におけるより特徴的な対人関係様式が見られると考えられる。

引用文献

American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed., DSM-5)*. Washington, DC: American Psychiatric Publishing. (アメリカ精神医学学会 高橋三郎・大野 裕 (監訳) (2014). *DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル* 医学書院)

安藤清志 (1994). セレクション社会心理学研究 1 見せる自分/見せない自分 自己呈示の社会心理学 サイエンス社

Barnow, S., Stopsack, M., Grabe, H. J., Meinke, C., Spitzer, C., Kronmuller, K., & Sieswerda, S. (2009). Interpersonal evaluation bias in borderline personality disorder. *Behaviour Research and Therapy*, 47, 359-365.

Canevello, A., & Crocker, J. (2011). Interpersonal goals, others' regard for the self, and self-esteem: The paradoxical consequences of self-image and compassionate goals. *European Journal of Social Psychology*, 41, 422-434.

榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, 48, 444-453.

First, M. B., Williams, J. B. W., Benjamin, L. S., &

Spitzer, R.L. (2016). *The structured clinical interview for DSM-5 personality disorders: SCID-5-PD*. American Psychiatric Association. (ファースト, M. B., ウィリアムズ, J. B. W., ベンジャミン, L. S., スピッツァー, R. L. 高橋三郎 (監訳) 大曾根彰 (訳) (2017). *SCID-5-PD DSM-5® パーソナリティ障害のための構造化面接* 医学書院)

Gosnell, C. L., Britt, T. W., & Mckibben, E. S. (2011). Self-presentation in everyday life: Effort, closeness, and satisfaction. *Self and Identity*, 10, 18-31.

原田 新 (2013). 青年期から成人期における自己愛と対人関係との関係性の変化 発達心理学研究, 24, 371-379.

Hart, W., Tortoriello, G. K., & Richardson, K. (2020). Profiling personality-disorder traits on self-presentation tactic use. *Personality and Individual Differences*, 156. doi: <https://doi.org/10.1016/j.paid.2019.109793>

市橋秀夫 (2017). パーソナリティ障害正しい知識と治し方 講談社

市川玲子・望月 聡 (2014). パーソナリティ障害間の概念的オーバーラップ 筑波大学心理学研究, 48, 59-69.

市川玲子・外山美樹・望月 聡 (2015). パーソナリティ障害特性における被拒絶感が自己認知および他者からの評価に対する欲求に及ぼす影響——自己関連動機のネガティブな効果の検討 パーソナリティ研究, 23, 142-155.

笠原 嘉 (1972). 正視恐怖・体臭恐怖——主として精神分裂病との境界例について—— 医学書院

Leary, M. R., & Allen, A. B. (2011). Personality and persona; Personality processes in self-presentation. *Journal of Personality*, 79, 1191-1218.

Leary, M. R., & Allen, A. B., & Terry, M. L. (2011). Managing social images in naturalistic versus laboratory settings: Implications for understanding and studying self-presentation. *European Journal of Social Psychology*, 41, 411-421.

Leary, M. R., Nezlek, J. B., Downs, D., Radford-Davenport, J., Martin, J., & McMullen, A. (1994). Self-presentation in everyday interactions: Effects of target familiarity and gender composition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 664-673.

- Lis, S., & Bohus, M. (2013). Social interaction in borderline personality disorder. *Current Psychiatry Reports*, 15(2), 338.
- 武蔵由佳・河村茂雄 (2016). 大学生における学校生活満足度と学校生活意欲との関連教育カウンセリング研究, 7, 35-44.
- 中間玲子 (2014). 青年期の自己形成における友人関係の意義 兵庫教育大学研究紀要, 44, 9-21.
- Nezlek, J. B., & Leary, M. R. (2002). Individual differences in self-presentational motives in daily social interaction. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 211-223.
- Paulhus, D. L., & Trapnell, P. D. (2008). Self-presentation of personality: An agency-communion framework. In O.P. John, R.W. Robins, & L.A. Pervin (Eds.), *Handbook of Personality: Theory and Research* (3rd ed., pp. 492-517). New York: Guilford Press.
- 酒井恵子 (1996). 自己高揚呈示の否定的側面に対する反応の個人差 心理学研究, 67, 314-320.
- 佐々木淳・菅原健介・丹野義彦 (2005). 羞恥感と心理的距離との逆U字的関係の成因に関する研究——対人不安の自己呈示モデルからのアプローチ—— 心理学研究, 76, 445-452.
- 佐藤広英 (2019). 対人コミュニケーションにおける自動的な印象操作が精神的健康に及ぼす影響 信州大学人文科学論集, 6, 49-58.
- Sherry, S. B., Hewitt, P. L., Flett, G. L., Lee-Baggley, D.L., & Hall, P.A. (2007). Trait perfectionism and perfectionistic self-presentation in personality pathology. *Personality and Individual Differences*, 42, 477-490.
- South, S. C., Oltmans, T. F., & Turkheimer, E. (2005). Interpersonal perception and pathological personality features: Consistency across peer groups. *Journal of Personality*, 73, 675-691.
- Swann, W. B. (1990). To be adored or to be known: The interplay of self-enhancement and self-verification. (In R.M. Sorrentino & E.T. Higgins (Eds.), *Handbook of motivation and cognition* (Vol. 2, pp. 408-480). New York: Guilford Press.)
- 谷口淳一・清水裕士 (2017). 大学新入生の自己高揚的自己呈示が友人関係の形成と自尊心に及ぼす影響——APIMを用いたペア縦断データの分析—— 実験社会心理学研究, 56, 175-186.
- 和田さゆり (1996). 性格特性語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67.
- Williams, T. F., Thomas, K. M., Donnellan, M. B., & Hopwood, C. J. (2014). The aversive interpersonal behaviors associated with pathological personality traits. *Journal of Personality Disorders*, 28, 824-840.
- Wright, A. G. C., Hopwood, C. J., & Simms, L. J. (2015). Daily interpersonal and affective dynamics in personality disorder. *Journal of Personality Disorders*, 29, 503-525.
- 吉田琢哉・高井次郎 (2008). 期待に応じた自己認知の変容と精神的健康との関連：自己概念分化モデル再考 実験社会心理学研究, 47, 118-133.
(受稿3月31日：受理10月6日)